

『文選音決』の音注と『文選』の解釋

—「見・樂」二字を例として—

一、はじめに

筆者は以前、拙稿「太宰春臺『倭讀要領』の「發音法」と『文選音決』の音注¹⁾」で、『倭讀要領』卷下「發音法(音ヲ發スル法)」に説く所に従つて『文選音決』(以下、おおむね「音決」と略稱)の「好惡・知識・飲食・衣冠」の諸例を考察することにより、『文選音決』の音注が單なる音注ではなく、『文選集注』²⁾に引く李善注・鈔・五臣注・陸善經注といった諸注と同じように、『文選』本文解釋の義注としても有用であることを證明したことがあつた。けれども、その拙稿では『倭讀要領』「發音法」に取り上げている上記以外の「見・樂・重・濟・易・度」といった諸字は、『音決』に見られる使用例を擧げて検討していなかった。そこで、この度それら未検討の諸字の内の僅か二字ではあるが、「見・樂」についての諸例を検討することによって、『音決』が單なる音注ではなく、『文選』本文解釋の義注としても有用であることを重ねて證明したいと思う。つまり、『音決』の義注としての有用性を更に證據立てたいと言ふのである。音注が義注を兼ねると言うのは、凡そ中國古典學研究に従事する者にとって常識であり、今更取

り上げるに値しないと讀者各位は思われるであらう。しかしながら、初學の者にとっては勿論のこと、従事すること久しい者にとつても、實際の諸例について具體的に見て、再確認することも意義無しとはいふまいであらう。

狩野充徳

言うまでもなく音注はその本文を理解せんがために、その第一歩として正しい字音で讀誦することが第一の役割・機能である。そのため、難字(畫數の多い複雑な字など)、出現頻度の低い隱僻な字、畫數が少なくても他の字と字形が似ているので紛れやすく、誤りやすい字、また一字兩讀字(一字に二音以上あるもの。固有名詞など、通常の音には讀まず、特別な音に讀むものも含む)などに音注を附けることになる。それによって本文を正しく朗讀できることになる。これが先ず本文理解・解釋の第一歩である。そして、この朗讀は、直接的には本文の單なる音讀(聲に出して讀む)ではあるが、朗讀する本人は勿論、それを周圍で聽く者にとつても、實は音讀を通して本文の意味把握・理解、更には鑑賞を行っているに他ならないのである。一字兩讀字以外の音注は、純粹に音のみを示す音注としての役割しかないが、もし本文に一字兩讀字が含まれている場合は、その本文においてどの

音であるのかを指定することにより、その音に應じた義・意味を把握し、本文を解釋しなければならぬ。この場合もやはり音讀を通して、本文の意味把握、本文理解を行っているのである。そうすると、この場合には單なる音注ではなく、義注を兼ねた注であることになり、『文選』本文解釋に有用となるのである。これが音注の第二の役割・機能である。音注が義注として本文解釋に有用であると言うのは、このことを指す。

ただ、中國古典學の基本的、重要文獻の『十三經注疏』を読む機會は多く、それら經書等の音義である『經典釋文』については利用する機會も必然的に多いとは異なつて、『文選音決』は以前には京大影印本があつたものの、流通すること少なく、容易には見られなかつた。ようやく最近になつて上海古籍出版社から『唐鈔文選集注彙存』三卷が刊行され、利用が容易になつた。そのようなこともあつて、『音決』の音注はこれまで『經典釋文』『漢書音義』『一切經音義』などの音注と同様に、漢語音韻學の資料として利用されて來たことはあつたが、必ずしも充分に利用されて來たとは言ひ難い。況や義注としては、積極的に利用しようと言ふことがなかつたのではないかと思ふ。それは『文選集注』のように李善注以下、多くの有用な義注があるので、それで十分に間に合うことがあつたからでもあろう。それでは『音決』を義注としてみた場合、李善注以下の義注と相違する、獨自の解釋があるのかと言ふと、大略は他の諸注と解釋が同じであることが多いと思はれる。このことを諸注の解釋の更なる附け足し、屋上屋を架すと見るのではなく、諸注の解釋の確かさ、正しさを更に後押し、追認するものと見たいと思ふ。他の諸注と異なる解釋の場合には、『音決』獨自の解釋として『文選』の解釋の幅を広げることになり、これはこれ

で珍重さるべきものであろう。

二、『音決』に見える「見・樂」字の音注を例として

『音決』に見える「見・樂」字の音注を取り上げて、義注としての立場から考察する前に、先ず『倭讀要領』『發音法』の要點を、(一) (二) (三)に分けて提示しておく。

(一) 發音法：「發音」とは「音」を「發」點發(點「」)して發す(「圈發(圈「〇」して發す)することである。「點して發す」とは、「四聲を點すること、四聲を點して、その音を發する、その音に讀む」ことである。分かり易く言えば、圈點(四聲を示す丸い點)を當該字の四角のどこかに附けて、指定された、その聲調の音に讀むことである。故に「圈發」とも言うのである。圈點を附ける位置は、當該字の左下の平聲から始めて時計回りに行き、右下の入聲で終わる。要するに、ある字に二つ以上の聲調がある場合、その指定された聲調に讀むのである。それはつまり、その聲調に應じた意味として解釋するのである。

字には①獨音、つまり一音のものと、②多音、つまり二音以上のものとがある。①獨音には點發を用いない。一音しかないので、四聲を區別する必要がないし、當然のことながら意味の違いによる音の別はないのである。一方、②多音は二音以上あつて、點發を用いる。「本音」(主要な音、基本の音、或いは本來の音)とそれ以外の「旁出音」(副次的な音)とから成る。本音は點發しないが、旁出音は點發を用いる。四聲異なるものと四聲同じきものがある。「發音法」に列擧された例は、好惡・知識・飲食・衣冠である。この八字四語(更に分

解すれば、八字八語になる)は、意味の違いによって聲調(四聲)が異なる。日本字音では、入聲を除いては區別し得ないものである。

(二)次に、同一聲調でありながら二音の別のある字が存在する。(一)で説明した觀點からすると、一字二音であっても、四聲同一の時には聲調の符號を付けて區別できないので、附ける意味がない、附けられないことになる。だが實際には四聲同一であっても、點發(圈發)する。それは四聲が同じであっても、二音である以上必ず本音と旁出音との別はあるので、旁出音の場合には點發して、通常の意味ではないことを知らせるためである。

著見：音現(去聲霰韻匣母)。點發する。吳音ケン、漢音ケン。

見聞：(去聲霰韻見母)。吳音・漢音共にケン。

歡樂：音洛(入聲鐸韻來母)。點發する。吳音・漢音共にラク。

音樂：(入聲覺韻疑母)。吳音・漢音共にガク。

(三)經史の注に音釋、即ち音注を附けるのは、多く難字に對してである。その音注には①反切、②直音、③四聲(聲調注)、④如字の四種がある。①反切：見・賢遍反。②直音：樂・音洛。③四聲：重・平聲。濟・上聲。易・去聲。度・入聲。④如字：旁出音に讀まず、本音に讀む。誤解する恐れのない時は注しない。

以下、この拙稿では(二)の部分を取り扱い、(三)については別稿を豫定したい。

二、一 見

先ず「見」である。『倭讀要領』卷下「發音法」には

著見ノ見ハ音現、アラハル、アラハス、シメスト訓ズ、俗現ニ作ル、見聞ノ見ト、音別ニシテ、同ク去聲ナリ、然レドモ現ノ音ナ

ルトキハ、去聲ニ點發シテ其誌トス、(振假名略。以下同じ)

と云う。「著見ノ見」は、「現れる。現す。示す」という意味で、『廣韻』では胡甸切(去聲霰韻匣母)の音であり、「露也」と訓じ、同切字即ち同音字として「見」のすぐ次に「現」を置き、「俗」と云う。

つまり「現」は、「見」字の俗字體であるとするのである。日本字音では吳音ケン、漢音ケン、現代中國語音はxianである。「見聞ノ見」は、「見る。見たこと」という意味であり、『廣韻』では古電切(去聲霰韻見母)の音で、「視也。又姓。出姓苑」と訓じる。日本字音では吳音・漢音共に「ケン」、現代中國語音はjianである。「著見ノ見」の意味の時には、『廣韻』の胡甸切の濁聲母が吳音に反映されて「ゲン」となっている。

『音決』は、前者「著見ノ見」に相當する音注が八個ある。それらを以下に列擧する。後者「見聞ノ見」は日常頻用の基本義なので、音注はない。

二、一、一 著見ノ見

「著見ノ見」即ち「見」を被注字として去聲霰韻匣母胡甸切の音に讀む音注は、『音決』では「見、何殿反」として八個あり、以下に擧げて検討する。この時は「現す。現れる。示す」の意味である。音注の所在は先ず算用數字で京大影印本の卷數・葉數・表(オ)裏(無表記)を示し、括弧内に上海古籍出版社本の冊數と頁數を示す(音注の見える箇所であって、その音注の該當本文の箇所ではない)。次に胡刻本の卷數を擧げる。その後作者名と作品名(「一首」の場合は「一首」を略する)とを上海古籍出版社本の「目錄」によって示す。また、必要に応じて李善注などの諸注を引用する。

1見、何殿反。59上・36オ(1・533) 第三十卷、鮑明遠「詠月城西門解中詩」

始見西南樓、織々如玉鈎。(始めて西南の樓に見れ、織々たること玉鈎の如し。◎弓張り月が現れ出る)

2見、何殿反。79・13(2・382) 第四十卷、任彦昇「奏彈曹景宗」

臣謹以劾、請以見事、免景宗所居官、下太常削爵土、收付廷尉、法獄罰罪。(臣謹みて以て劾し、請ふ見事を以て、景宗が居る所の官を免じ、太常に下して爵土を削り、廷尉に收付し、法獄に罪を罰せしめんことを。◎私任彦昇は「御史中丞として」、曹景宗の罪状をあばき明らかにして責め、現に在る事實を根據として、曹景宗が就いている官を免職にし、太常官に下し、その爵位と封地を削除し、捕らえて廷尉「裁判所」に引き渡し、監獄に收監して罪を定めるよう願います)

「見事」は今日の此の事、現に在る、存在する、目の前の、明らかになつてゐる事實。見は形容詞で、「現有の、現に在る」の意。『昭明文選譯注』は、注「99」で、「見：同現」と云い、その譯に「現在之事」と云う。なお、「故訓匯纂」二〇八六頁④は「見、謂見在也」として『漢書』王莽傳「見穀」の顏師古注を引く。『漢語大詞典』第十册三百十一頁は「現成」と説明し、「見3卒」「見3糧」を見よと云う。

3見、何殿反。79・23オ(2・401) 第四十卷、任彦昇「奏彈劉整」

臣等參議、請以見事、免整新除官、輒勒外收付廷尉、法獄罰罪。(臣等參議し、請ふ見事を以て、整の新たに除せられし官を免じ、輒ち

『文選音決』の音注と『文選』の解釋

外に勒して廷尉に收付し、法獄に罪を罰せしめんことを。◎私達は協議致しました。どうか今日のこの事實に基づいて劉整の新任の官を免じ、すぐさま捕らえて監獄に收監し、裁判官に引き渡して處罰するように)

これも2と同じ意味である。『昭明文選譯注』は、注「104」(第四册、四九五頁)で「見事：猶今事」と云い、その譯に「今天這事」(第四册、四九八頁)と云う。

4見、何殿反。79・37(2・430) 第四十卷、沈休文「奏彈王源」※歸字「見」を重複して衍す。

臣等參議、請以見事、免源所居官、禁錮終身、輒下禁止視事如故。(臣等參議し、請ふ見事を以て、源が居る所の官を免じ、禁錮すること終身ならしめ、輒ち下して事を視るを禁止すること故の如きを。

◎私達は合議致しました。どうか今ある事實によって、王源の任じている官を免じ、終身、官に就かせないようにし、さっそく命じて舊來のやり方に従つて、政務を取ることを停止するよう願います)

これも2と同じ意味である。『昭明文選譯注』は、注「122」(第四册、五〇八頁)で、「見事：現有的事實」と云い、その譯に「目前事實」(第四册、五一〇頁)と云う。

5見、何殿反。79・48(2・452) 第四十卷、繁休伯「與魏文帝牋」

時都尉薛訪車子、年始十四、能喉轉引聲、與笳同音。白上呈見、果如其言。※「車」字も「申」に誤る。今胡刻本に従う。「引」字胡刻本に従う。(時に都尉の薛訪の車子、年始めて十四、能く喉轉して聲を引き、笳と音を同くす。上に白して呈見するに、果して其の言の如し。◎申し上げて薦める)

「呈見」は呈し見むと讀み、はつきりと示して・申し上げて(呈)、薦める(見)の意味である。「見」は「すすめる」の意。『全譯漢辭海』一二八七頁には、「ススム」と讀み、「引き合わせる。推薦する」の意とする。『漢語大詞典』第十冊三百十二頁は「介紹・荐舉」と説明し、『左傳』などの例を擧げる。

6見、何殿反。93・12(3・24)第四十七卷、王子淵「聖主得賢臣頌」

昔賢者之未遭遇也、圖事揆策、則君不用其謀。陳見惻誠、則上不然其信。(昔賢者の未だ遭遇せざるや、事を圖り策を揆れば、則ち君其の謀を用ひず。惻誠を陳べ見せば、則ち上其の信を然りとせず。◎賢臣がしかるべき時に巡り會わなければ、どんなに事を諮り策を謀つても、君はその謀事を用いず、眞心を述べ表しても、君はその誠意を信じない)

「陳見」は、(惻誠、眞心を)述べ表すこと。

7見、何殿反。94下・17オ(3・353)第四十七卷、袁彦伯

「三國名臣序贊」

公瑾英達、朗心獨見。(公瑾は英達にして、朗心は獨り見る。◎「吳の將軍」周瑜は優れた才能を持ち、判斷力は獨り明らかで、他人より抜きん出ていた)

「見」は、あらわれるという動詞で、判斷力が外の誰よりも明らかに現れていて、ずば抜けていることを言う。

8見、何殿反。113下・8オ(3・730)第五十七卷、潘安仁

「馬汧督誅并序」

錘未見鋒、火以起燭。(錘未だ鋒を見ざるに、火以て燭を起す。

◎「敵の」すぎが地面にその先を出さないのに、「地中を掘り進ん

で来る敵の居場所を知り、「火をつけて炎を起こし敵を焼こうとした」)

「見」は動詞で、すぎの先端を現す。表に(その姿が見えるように)はつきり現すこと。

以上を簡單にまとめみると、1見：現れる。動詞。2・3・4見事：今現在に在る事實。見：現有の。今現在に在る、存在する。形容詞。

5「呈見」熟語。見：すすめる。動詞。6「陳見」熟語。見：表す。

動詞。7見：現れる。動詞。8見：現す。動詞、のようになる。「現れる」「現す」「表す」という意味の動詞(自動詞・他動詞の別があるにせよ)が四箇、「すすめる」という動詞が一個、「今現在に在る、存在する」という意味の形容詞が三個である。つまり、常用語としての動詞「みる」や「まみえる」、助動詞「る・らる」ではないということが分るし、それによって朗讀、本文解釋の手引きとなつていふことが分る。

二、一、二 見聞ノ見

次に「見聞ノ見」である。『音決』には、去聲霰韻見母古電切の音に讀む「見」(開口)を音注の對象とする、つまり被注字として音注を附けている例はない。漢字を習う時、最初に出て来る、最も基本的な常用字で、古典に頻出するものであるから、當然のことである。基本、常用、平易な字であるから、被注字として出て来ないということとは、逆に注字の反切下字として用いるには適している、相應しいということなので、これを下字に用いる反切は多いことになる。實際、『音決』の霰韻所屬の被注字を見ると、反切が十三種、被注字十三種・延べ二十一個あり、すべて「見」字が反切下字として用いられている。

『廣韻』には去聲霰韻字として「練・片・宴・殿・電」などの諸字があつて、これらも下字に相應しいと思うが、「見」字以外の他の下字の使用例はない。なお、反切以外では「麵音晒」などの直音の音注が延べ六個ある。また、『音決』では被注字が去聲霰韻合口の場合には、「見」字は下字として用いられておらず、例えば「絢火縣反」(8・38、59下・21オ)、「絢許縣反」(113上・5)のように、「縣」字を用いている。これは歸字が合口であれば、下字に合口を使うというのが原則であるから、合口字の「縣」字を使い、開口字の「見」が使われないのも道理である。

二、二 樂

次に「樂」字に移る。『倭讀要領』は上引の「見」の後にすぐ續けて

歡樂ノ樂ハ音洛、タノシムト訓ズ、音樂ノ樂ト音別ニシテ、同ク入聲ナリ、然レドモ洛ノ音ナルトキハ入聲ニ點發シテ其誌トス、此等「筆者注：見・樂」ハ四聲異ナラザレドモ、旁出ノ音ナルコトヲ知ラシメン為ニ點發スルナリ、餘ハ此例ヲ以テ推ベシ、と云う。これは、「音樂ノ樂」を「本音」とし、「歡樂ノ樂ハ音洛」を「旁出ノ音」とするものである。『音決』或いは『經典釋文』を見る限り、確かに「音ガク」(吳音・漢音同じ。現代中國語音yǎo)の音注は、「音ラク」(吳音・漢音同じ。現代中國語音yǎo)のそれよりも遙かに少ない。さて、ここにはラクとガクの二音しか擧げていないが、『音決』ではもう一つ吳音「ゲウ」・漢音「ガウ」という音がある(現代中國語音gāo)。そして、それぞれに意味が異なっている。

二、二、一 歡樂ノ樂

二、二、一、一 音洛

先ず「音洛」の場合である。『廣韻』は入聲鐸韻來母「盧各切」で、「喜樂。又五角五教二切」と云う。「樂しむ。樂しい。樂しみ」という意味である。『音決』では「ラク」と讀む音注は、直音では「音洛」が三十四個、その内二個が更に「下同」と云う。外に「樂音落」が一個、「樂音絡」が一個、反切として「樂、力各反」が二個ある。二個の「下同」を含めれば、全部で四十個あることになる。以下、これら諸例について見る。

1 樂音洛。8・36(1・72)第四卷、左太冲「蜀都賦」

斯盖宅土之所安樂、觀聽之所踴躍也。(斯れ盖し宅土の安樂する所、

觀聽の踴躍する所なり。◎以上のような事は、住んでいる蜀の地が安らかで樂しく、見たり聞いたりすると、跳ね飛び上がって喜ぶものでしょう)

「宅土」は住んでいる土地で、蜀の地を言う。「樂」は、ここでは「安樂」という熟語の成分となって、樂しく感じるという意味の動詞として使われている。

2 樂音洛。9・58オ(1・195)第五卷、左太冲「吳都賦」※

「樂音」の下、「洛」の上に「決樂音」の三字を衍す。

於是樂只衍、而歡飫無匱。【李善曰、毛詩曰、其樂只且。又曰、嘉賓式宴以衍。又曰、飲酒之飫。……。鈔曰、衍、樂也。詩云、樂只君子。飫、飽也。匱、盡竭也。謂樂此吳土地、无極盡也。……。】(是に於て只の衍しみを樂しみ、歡飫して匱くること無し。◎そこで此の吳の地を樂しんで、酒食に飽いて歡樂は極まることありません)「樂」は、「只衍」を目的語に取る、「樂しむ」という意味の他動詞

である。「只衍」の「只」は、『毛詩』周南「樛木」に「樂只君子、福履綏之」(只の君子を樂しましめ、福履之を綏んず)の句があり、『經典釋文』には「只、之氏反。猶是也」と云う。語調を整える助辭で、訓讀では普通讀まないが、いま『經典釋文』に従って「この」と讀んだ。『毛詩』小雅「南山有臺」に「樂只君子、邦家之基」とあり、その鄭箋に「只之言是也」と云う。また小雅「采芣」にも同一の「樂只君子、福祿申之」の句があり、この鄭箋もこと同じである。「樛木」の「釋文」の依る所である。『毛詩』小雅「南有嘉魚」に「君子有酒、嘉賓式燕以衍」の句があり、その毛傳に「衍、樂也」と云う。

3 樂音洛。4 8 天・2 8 6 (1・2 7 7) 第二十四卷、陸士衡「於承明作與士龍詩」※「音決樂」の三字は補寫。

感別慘舒翮、思歸樂遵渚。【李善曰、舒翮謂鵠、遵渚謂鴻。言感別之情、慘於舒翮之飛鵠。思歸之志、樂於遵渚之征鴻。蘇武詩曰、黃鵠一遠別。毛詩曰、鴻飛遵渚。】(別れに感じては舒翮よりも慘たりて、歸るを思ひては遵渚より樂し。◎辛い別れに感じると、羽を伸ばして飛ぶ鵠よりも慘めで悲しく、故郷に歸らんとする氣持ちは、渚に沿って飛ぶ鴻よりも樂しい)

以下、紙幅の都合により、また煩を避けて一々檢討を加えず、本文と訓讀・意味のみを記し、必要に応じて説明を加えることにする。

4 樂音洛。5 9 上・1 1 1 才 (1・4 8 3) 第三十卷、陶淵明「讀山海經詩」

俛仰終宇宙、不樂復何如。(俛仰して宇宙を終へ、樂しまずして復た何如せん。◎樂しむ)

5 樂音洛。5 9 上・2 5 (1・5 1 2) 第三十卷、謝靈運「齋中讀書詩」

執戟亦以疲、耕稼豈云樂。(執戟も亦た以て疲れ、耕稼豈に云に樂しまんや。◎樂しむ)

6 樂音洛。6 3・7 (1・7 9 8) 第三十二卷、屈平「離騷經」惟夫黨人之偷樂兮、路幽昧以險隘。(惟ふに夫の黨人の偷樂せる、路幽昧にして以て險隘なり。◎樂しむ)

7 樂音洛。6 3・2 2 才 (1・8 2 7) 第三十二卷、屈平「離騷經」

人生各有所樂兮、余獨好脩以為常。(人生各おの樂しむ所有り、余獨り脩を好みて以て常と為す。◎樂しむ)

8 樂音洛。6 6・4 (2・8) 第三十三卷、宋玉「招魂」

舍君之樂處、而離彼不祥些。(君の樂しき處を捨てて、彼の不祥に離く。◎樂しい)

9 樂音洛。6 6・2 9 (2・5 8) 第三十三卷、宋玉「招魂」

耐飲盡歡、樂先故些。(耐飲して歡を盡くし、先故を樂しましむ。◎樂しむ)

下文「二、二、二 音樂ノ樂」の「1 樂音岳、下音洛。6 6・2 9

(2・5 8)」で論じるので、そこを参照されたい。

10 樂音洛。6 8・3 5 才 (2・1 4 9) 第三十四卷、曹子建「七啓八首」第六首

情放志蕩、淫樂未終。(情は放たれ志は蕩にして、淫樂して未だ終へず。◎樂しむ)

11 樂音洛。6 8・4 2 才 (2・1 6 3) 第三十四卷、曹子建「七啓八首」第七首

君子樂奮節以顯義、烈士甘危軀以成仁。(君子は樂しみて節を奮ひて以て義を顯し、烈士は甘じて軀を危ふくして以て仁を成す。◎樂しむ)

12 樂音洛。73下・9下同(2・309)第三十七卷、曹子建「求自試表」

臣聞騏驎長鳴、伯樂昭其能。(臣聞く、騏驎長く鳴きて、伯樂其の能を昭らかにすと。◎伯樂は人名)

13 樂音洛。「73下・9」下同(2・312)第三十七卷、曹子建「求自試表」

今臣志陶馬之微功、竊自惟度、終無伯樂韓國之舉。※梓内の「狗」字、元缺。今胡刻本に依り補う。21・23・27の例も同じ。(今臣狗馬の微功に志し、竊かに自ら惟ひ度るに、終に伯樂韓國の舉無し。◎伯樂は人名)

この二例(また下文29)は、古代の有名な名馬鑑定士「伯樂」という人名に附いた音注である。「ハクガク」と讀まず、「ハクラク」と讀むことを示している。人名・地名など固有名詞は、時に通常讀む音とは異なつて、特殊な讀み方をする¹⁵⁾ことがある。凡そ中國古典研究に従事し、『文選』を讀解しようとするほどの者が、この人名を知らぬという¹⁶⁾ことは有り得ないが、初學者に「ラク」と讀むことを知らしめたのであり、念のためということであろう。

14 樂音洛。79・52(2・460)第四十卷、繁休伯「與魏文帝牋」

※音注字「洛」、一部殘缺す。
宴喜之樂、盖亦無量。(宴喜の樂しみは、盖し亦た無量ならん。◎樂しみ。樂しさ)

15 樂音洛。85上・9下同(2・486)第四十三卷、嵇叔夜「與山巨源絕交書」※「音洛」の下に踊り字「ㄥ」有りて、見せ消ちにす。

遊山澤、觀魚鳥、心甚樂之。一行作吏、此事便廢。安能捨其所樂、而

『文選音決』の音注と『文選』の解釋

從其所懼哉。(山澤に遊び、魚鳥を觀れば、心甚だ之を樂しむ。一たび行きて吏と作らば、此の事便ち廢す。安んぞ能く其の樂しむ所を捨てて、其の懼るる所に從はんや。◎樂しむ)

16 樂音洛。「85上・9」下同(2・486)訓讀は15を見よ。
安能捨其所樂、而從其所懼哉。(◎樂しむ)

17 樂音洛。85下・38(2・581)第四十三卷、趙景眞「與嵇茂齊書」※「音洛」の「洛」字、一部殘缺す。

豈能與吾同大丈夫之憂樂者哉。(豈に能く吾と大丈夫の憂樂を同じくする者ならんや。◎樂しみ)

18 樂音洛。88・33(2・652)第四十四卷、陳孔璋「檄吳將校部曲文」

若乃樂禍懷寧、迷而忘復、……、以至覆沒、大兵一放、玉石俱碎。(乃ち禍を樂しみて寧きを懷ひ、迷ひて復るを忘れ、……、以て覆沒に至るが若きは、大兵一たび放れば、玉石俱に碎けん。◎樂しむ)

19 樂音洛。88・48(2・682)第四十四卷、鍾士季「檄蜀文」

百姓士民、安堵樂業。(百姓士民は、安堵して業を樂しむ。◎樂しむ)

20 樂音洛。88・65オ(2・713)第四十四卷、司馬長卿「難蜀父老」

且夫王者固未有不始於憂勤、而終於佚樂者。【李善曰、毛詩序曰、始於憂勤、終於逸樂也。鈔曰、言始能憂勤、則終獲逸樂也。劉良曰、憂勤謂征伐也。言王者皆初征伐、而後逸樂也。】(且つ夫れ王者は固より未だ憂勤に始まり、佚樂に終らざる者有らず。◎樂しい。氣樂である)

李善注に指摘するように『毛詩』小雅「魚麗」の序に「始於憂勤、終於逸樂」(憂勤に始まり、逸樂に終る)とあって、「逸樂」は「憂勤」

である)

(苦勞して努める)に對する語として使われ、「落ち着いて楽しい」の意である。佚は逸に通じる。32も同じ。

21樂音洛。91上・5(2・728)第四十六卷、陸士衡「豪士賦序」

※「音決」の「決」字及び「樂音洛」の「樂音」の二字は補寫。

而大欲不乏於身、至樂無愆平舊、節効効而德弥廣、身愈逸而名愈効。

(而して大欲は身に乏しからず、至樂は舊に愆つこと無く、節は効いよ効はれて德は弥いよ廣く、身は愈いよ逸にして名は愈いよ効しからん。◎最高の樂しみ)

22樂音洛。91下・12(2・807)第四十六卷、王元長「三月三日曲水詩序」

日曲水詩序

草萊樂業、守屏稱事。(草萊は業を樂しみ、守屏は事に稱ふ。◎樂しむ)

23樂音洛。91下・27(2・837)第四十六卷、王元長「三月三日曲水詩序」

日曲水詩序

同律克和、樹草自樂。(同律は克く和し、樹草自ら樂しむ。◎樂しむ)

24樂音洛。91下・39オ(2・860)第四十六卷、王元長「三月三日曲水詩序」

三日曲水詩序

信凱宴於在藻、知和樂於食萃。【李善曰、詩云、魚在藻、有頌其尾。

王在鎬、飲酒樂凱。毛詩序曰、鹿鳴廢則和樂缺。詩曰、呦々鹿鳴、

食野之萃。】※「呦」もと「吻」の如くに作る。(凱宴を在藻に信じ、

和樂を食萃に知る。◎魚が水藻に戯れるように心から宴會を樂しみ、

鹿が野の萃を食べるようにじつくりと和らぎ樂しみます。◎和らぎ

樂しむ。睦まじくして樂しむ)

25樂音洛。93・35オ(3・69)第四十七卷、劉伯倫「酒德頌」

無思無慮、其樂陶々。(思ふこと無く慮ること無く、其の樂しみは陶々

たり。◎樂しみ)

26樂音洛。93・45(3・90)第四十七卷、陸士衡「漢高祖功臣頌」

平陽樂道、在變則通。(平陽は道を樂しみ、變に在れば則ち通ず。◎

樂しむ)

27樂音洛。94上・1オ(3・198)第四十七卷、夏侯孝若「東方朔畫贊并序」

朔畫贊并序

大夫諱朔、字曼倩、平原厭次人也。魏建安中、分厭次以爲樂陵郡、故

又爲郡人焉。事漢武帝、漢書具載其事。(大夫諱は朔、字は曼倩、

平原厭次の人なり。魏の建安中、厭次を分ちて以て樂陵郡と爲す。

故に又郡人と爲す。漢の武帝に事へ、漢書具に其の事を載す。◎魏

の建安年間に、厭次縣を分けて樂陵郡とした)

「ラクリョウ」という郡名で、固有名詞である。前掲の中國語譯

(第五卷、四五三頁、注「4」)は「laoyang」とする。それならば、

日本字音「ラウ」であり、12・13樂の箇所所述べたように、地名

の特殊な讀み方になる。『漢語大詞典』などはこの音を記載しない。

28樂音洛。94上・14オ(3・224)第四十七卷、夏侯孝若「東方朔畫贊并序」

方朔畫贊并序

樂在必行、處儉罔憂。(樂しむ在れば必ず行ひ、儉に處るも憂ひ罔し。

◎樂しみ。平和な世の中を樂しむこと)

29樂音洛。94上・27オ(3・250)第四十七卷、袁彥伯「三國名臣序贊」

名臣序贊

夫未遇伯樂、則千載無一驥。(夫れ未だ伯樂に遇はざれば、則ち千載

も一驥無し。◎伯樂は人名) 12・13を參照。

30樂音洛。98・109上(3・422)第四十九卷、干令升「晉紀

總論

雖太平未洽、亦足以明吏奉其法、民樂其生、百世之一時矣。(太平は未だ洽からずと雖も、亦以て吏は其の法を奉じ、民は其の生を樂しむは、百世の一時なるを明らかにするに足る。◎樂しむ)

31 樂音洛。9 8・1 1 9 上(3・4 5 3) 第四十九卷、干令升「晉紀總論」

皆樂其生而哀其死。(皆其の生を樂しみて、其の死を哀しむ。◎樂しむ)

32 樂音洛。9 8・1 2 6 (3・4 7 6) 第四十九卷、干令升「晉紀總論」

始於憂勤、終於逸樂。(憂勤に始まり、逸樂に終る。◎樂しい。氣樂である) 20を参照。

33 樂音洛。1 0 2 下・9 (3・6 2 8) 第五十一卷、王子淵「四子講德論并序」

進者樂其條暢、怠者欲罷不能。(進む者は其の條の暢ぶるを樂しみ、怠る者は罷めんと欲して能はず。◎樂しむ。喜ぶ)

34 樂音洛。1 0 2 下・1 5 才(3・6 3 9) 第五十一卷、王子淵「四子講德論并序」

今海内樂業、朝廷淑清。(今海内は業を樂しみ、朝廷は淑清なり。◎樂しむ)

35 樂音洛。1 0 2 下・2 2 (3・6 5 4) 第五十一卷、王子淵「四子講德論并序」

夫鴻均之世、何物不樂。(夫れ鴻均の世は、何物か樂しまざらん。◎樂しむ)

36 樂音洛。1 1 6・5 才(3・7 8 7) 第五十八卷、蔡伯喈「陳仲弓

碑文并序

樂天知命、澹然自逸。(天を樂しみ命を知り、澹然として自ら逸す。◎樂しむ)

二、二、一、二 樂音落

「ラク」に讀む直音注の第二種である。例が一個ある。

1 樂音洛。8・3 1 (1・6 2) 第四卷、左太冲「蜀都賦」
樂飲今夕、一醉累月。(今夕に樂飲し、一醉月を累ぬ。◎樂しく飲む)

二、二、一、三 樂音落

「ラク」に讀む直音注の第三種である。例が一個ある。
1 樂音洛。6 8・2 8 (2・1 3 6) 第三十四卷、曹子建「七啓八首」
第四首

玄微子曰、「予樂恬靜、未暇此觀也。」(玄微子曰く、予恬靜を樂しみ、未だ此の觀に暇あらざるなりと。◎樂しむ)

二、二、一、四 樂、力各反

「ラク」に讀む反切の音注である。例が二個ある。
1 樂、力各反。1 0 2 上・9 才(3・5 9 1) 第五十一卷、王子淵「四子講德論并序」

今吾子何樂此詩而詠之也。(今吾子は何ぞ此の詩を樂しみて之を詠ずるや。◎樂しむ)。

2 樂、力各反。1 1 3 上・8 (3・6 7 2) 第五十七卷、潘安仁「夏侯常侍誄并序」

決彼樂都、寵子惟王。【李善曰、左氏傳、延陵季子曰、決々乎大風也

哉。南都賦曰、於顯樂都。鈔曰、樂都謂南陽也。決、盛也。……。
劉良曰、決、大也。……。】(決たる彼の樂都に、寵子惟れ王たり。

◎楽しい都)

以上、音ラクの場合は、一、樂しむ(動詞)。二、樂しい(形容詞)。
三、樂しみ(名詞)の意味として文義を捉え得ることが分かった。
これらの意味は一字語のみではなく、二字熟語としても共通である。
1 安樂、6 偷樂、10 淫樂、19・22・34 樂業、24 和樂、26
樂道、30・31 樂(其)生、36 樂天は、動詞として「樂しむ」の
意味であり、20 佚樂・32 逸樂は、形容詞として「樂しい」の意
味である。17 憂樂・21 至樂は、名詞として「樂しみ」の意味である。
固有名詞として、12・13・29 伯樂は人名であり、27 樂陵は地
名である。この人名・地名には「ラク」と讀む場合の意味が込められ
ていると考えられるが、これには別に廣く、深い考證が必要であり、
今はその時ではない。また、ここにはその意味を一つ説明しないが、
10 淫樂、21 至樂、24 和樂は「ガク」と讀むか、「ラク」と讀む
かで意味が異なる。このような場合、どちらに讀んでどの意味に取る
べきかは、前後を見れば自ずと明らかであるにせよ、中には紛らわし
い、どちらにでも取れるということも考えられる。まして初學者には
その判断が難しいということが考えられる。そのような場合に音注が
あれば、その判断・判別が容易になるであろう。そのことは『經典釋
文』の「樂」字の音注で、「又音、一音、又反」或いは「獨樂、皇音
洛、庚音岳」(『禮記』樂記)と云うような注釋家による音の相異の例
を見れば、了解されるであろう。

二、二、二 音樂ノ樂

次は、「音樂」の樂ガクと讀む例である。『廣韻』では入聲覺韻疑母
「五角切」で、「音樂。周禮有六樂。……又姓。……。」と云う。上に
引いた『倭讀要領』に「歡樂ノ樂ハ音洛、タノシムト訓ズ、音樂ノ樂
ト音別ニシテ、同ク入聲ナリ、然レドモ洛ノ音ナルトキハ入聲ニ點發
シテ其誌トス、此等ハ四聲異ナラザレドモ、旁出ノ音ナルコトヲ知ラ
シメン為ニ點發スルナリ」と云うように、「ガク」が「本音」であり、
「ラク」が「旁出ノ音」であるので、「ガク」に讀む音注は必ずしも必
要ではない。實際『音決』では「ラク」と讀む音注は、上に見たよう
に二個の「下同」を含めれば、全部で四十個ある。これに對して「音
樂ノ樂」に當たる「樂音岳」の音注は、僅か三個に過ぎない。もし
『文選集注』が全卷残っていたとすれば、「音洛」の音注と「音岳」の
それとの數量的な差は、もつとあつたであろう。しかしながら、「ラ
ク」の意味と「マギラハシキコトアル」時に音注を附けるのであるか
ら(注(5)を参照)、特に「樂音岳」の音注を附けて、「ラク」との
紛らわしさを避けることがあつたものと思われる。以下例を見てゆく。
1 樂音岳、下音洛。66・29(2・58)第三十三卷、宋玉「招魂」
耐飲「樂」盡歡、樂先故此。【王逸曰、故、舊也。言飲酒作樂、盡已
歡欣者、誠欲樂我先祖、及與故舊人也。音決、樂音岳、下音洛。陸
善經曰、衆坐之人皆有所極、同心賦詩、飲耐盡歡、以樂先故之時也。
今案、音決陸善經本飲為樂。】(耐樂して歡を盡くし、先故を樂しま
しむ。◎音樂を奏でる)

上文「二、二、一、一 音洛」の「9 樂音洛。66・29(2・58)」
に既出である。そこでは論じなかったが、この案語に依れば、本文
「耐飲盡歡、樂先故此」の「飲」を音決本では「樂」に作っていたこ

とが分かる。『音決』に「樂音岳、下音洛」と云うのは、その本文「耐樂」の「樂」が「音岳」であり、すぐ下に續く「樂先故此」の「樂」が「音洛」であることを言う。従って、「耐樂して歡を盡くし、先故を樂しましむ」と讀み、「酒盛りをして音樂を奏し、樂しみを盡くしては、我が先祖や古なじみを樂しませる」の意味となる。上下の句に間を置かず「樂」字が出て來るので、上の「樂」は「音樂を奏でる」、下の「樂」は「樂しませる」というように、それぞれに意味が違ふことをはっきり示そうとして、わざわざこの音注「樂音岳」を附けたものと思われる。なお、これを「耐樂盡、歡樂先故此。」と句讀を附けて、「耐樂盡くして、先故を歡樂せしむ」と讀み、「思う存分に酒宴をし、音樂を奏でて、我が先祖や舊友を喜び樂しませる」と取るのも可能であろうが、この前後の四字句のリズムをくずすことになるので、取らない。

2 樂音岳。68・40オ(2・159) 第三十四卷、曹子建「七啓八首」第六首

於是為歡未渫、白日西頹。散樂變飭、微步中閭。(是に於て歡を爲して未だ渫まざるに、白日西に頹る。樂を散じ飭を變じ、中閭に微歩す。◎こうして、まだ十分には樂しみ盡くさないのに、白日は西に傾いた。音樂をやめて服裝を換え、部屋の中をゆったりと歩きま

す) ころは「音樂」の意味である。

3 樂音岳。68・49オ(2・177) 第三十四卷、曹子建「七啓八首」第八首

散樂移風、國靜民康。(樂を散じ風を移し、國靜かにして民康し。◎禮樂を敷き廣め、風俗を改め、國は安らかで、民は安泰です)

ここは、「禮樂」の意味である。以上をまとめると、「音岳」の場合は、禮樂、音樂、或いは音樂を奏するという意味になっている。

二、二、三 樂音ゲウ・ガウ

1 樂、五孝反。63・22オ(1・827) 第三十二卷、屈平「離騷經」

人生各有所樂兮、余獨好脩以為常。【王逸曰、言萬人稟天命而生、各有所樂、或樂諂佞、或樂貪淫、我獨好脩正直以為常行也。】(人生各おの樂しむ所有り、余獨り脩を好み以て常と為す。◎人の生き方には人それぞれに願ひ欲するものがある。自分だけは正直・忠信の道を好んで修めるのを常とした)

上記「二、二、一、一 音洛」の「7 樂音洛。63・22オ(1・827)」の又音である。『廣韻』は去聲效韻疑母「五教切」で「好也。願う。欲する」という意味である。『故訓匯纂』(一一四七頁)を繙けば、「好也。喜好也。謂愛好。願也。欲也。樂欲也。愛欲。愛也」などの訓詁を列記している。音ラクに讀んで、「樂しむ」「好きである」という意味に取るのが通常の解釋であろうが、又音として吳音「ゲウ」漢音「ガウ」と讀み、「願う」と取る説もあるというものである。宋、

洪興祖の『補注』には「樂、魚教切。欲也」と云う。『論語』雍也に「知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽」とあって、その『釋文』に「樂、音岳。又五孝反。注及下同。知者樂、五孝反。下同」と云うのがこの例である。ただ普通「知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ」と訓讀しているので、音「ゲウ・ガウ」ではなく、音

「ラク」であると思われるかも知れない。朱子の注は「樂、上一字、竝五教反。下一字音洛。樂、喜好也」と云う。この意味の場合、「樂しむ」の意味と基本的に通ずる所があるが、その意味に比べて、願う・欲するという、自らの希求・希望の氣持が強いのが、その違いであろう。ここに引いた『論語』の例のように、音「ゲウ」は『經典釋文』²²⁾に見えているので、既に六朝以來この読み方があったものと思われる。

以上、『倭讀要領』『發音法』に挙げた音注の諸例を『文選音決』に實例を求めて一通り検討した。

三、おわりに

ここまで、『倭讀要領』『發音法』に挙げた音注の諸例について『文選音決』に實例を求め、その音注に依って『文選』本文の解釋を試みた(これは逆にまた、『倭讀要領』の意味する所を『音決』の音注の實例から理解することにもなる)。このようにして、『音決』の音注は、その音と結びついた義を指定して義注の機能を果たし、その結果、『文選』の本文解釋にも有用となることを示すことができたと思う。しかし、ここには論じなかった「重」字などは、『故訓匯纂』を繙いてみれば分かるように、同音の場合でも様々な意味があり、本文の意味はそのどれであるのかを指定するとなると、なかなか難しい。そのような場合は、直接『李善注』『鈔』『五臣注』『陸善經注』などの訓詁を見た方が手取り早く、それぞれに『文選』本文の解釋が得られる。従って、『音決』を義注として見ても、『文選』解釋の上で他の諸注以上に優れた役割を果たすものではないかも知れない(ただ、その

ような意味の場合、『音決』ではこのように讀むのだということが讀者に了解されて、本文の音讀を誤ることはない)。そこで、『音決』の音注は、その字音を示しているに過ぎないからと、ただ一通り目を通すだけというのでは、少々軽い扱われ方になる。漢字・漢語の特徴として音と義とが表裏一體の関係にあることが念頭にあれば、常に義を考えてみるということが必須である。これは何も『音決』に限ったことではなく、『經典釋文』『漢書音義』『一切經音義』等の音義についても同様のことが言える。

音義を漢語音韻學の重要な資料として使用する、或いは考證學に利用することがこれまで屢々行われて来た。しかし、音義の本来の役割は、飽くまでも本文理解のための注釋であるから、その著作意圖に立ち返って、本文の讀誦は勿論のこと、本文の解釋に用いてみることは大切なことであろう。ただ、『音決』には、李善注等の諸注と本文解釋が異なる、独自の解釋があるのかと言うと、どうもそれは無いようである(この點は、集注本の諸注を仔細に検討する必要がある、今後に期したい)。それならば、義注として見る意義は無い、有っても薄いと考えるのではなく、他の義注の解釋が正しいことを追認する、確認するものだと思いたい。抑そも、その音を指定することは、それに結びついた義を直ぐに思い浮かべ、本文を朗讀しながら、同時にその意味把握を行っていることになる。そして、他の注が無い時には、本文解釋の一つの参考となるかも知れない。このように考えると、『音決』の反切・直音などの音注をその本來的機能に立ち返って、本文讀解のための音注・義注として有効利用したいと考えるのである。

注

(1) 『中國中世文學研究』第四五・四六合併號、二〇〇四年、一三―二四頁

(2) 『倭讀要領』(勉誠社文庫六六、勉誠社、昭和五四年)

(3) 昭和十年(一九三五)から同十七年(一九四二)にかけて發行された『京都帝國大學文學部景印舊鈔本』第三集から第九集までに收められている。これを「京大影印本」と略稱する。ただ卷九十八は、現在臺灣の臺北中央圖書館に蔵されており、邱燦錫『文選集注研究(一)』(『文選學研究會、一九七八年)に附録として影印されている。實例を引用する場合、この著書全體の算用數字に依る頁數とその上下段(上段は「上」と記し、下段は何も記さない)により示す。本文「31樂音落。98・119上(3・453)、32樂音落。98・126(3・476)」がその例である。また、胡刻本の卷二十四の一部に當たる殘卷が、上海古籍出版社から一九九七年に出版された『天津市藝術博物館藏敦煌文獻②』に收録されている。實例を引用する場合、他の集注本殘卷の卷數に併せて卷四十八とし、48天・頁數で表す。本文「3樂音落。48天・286(1・277)」がその例である。更に東京お茶の水の成實道文庫に所蔵する卷六十一の殘卷がある。これらには富永一登・衣川賢次「新出『文選』集注本殘卷校記」(『中國中世文學研究』第三六號、平成十一年)があつて、この兩テキストの解題並びに校勘記がある。また、『唐鈔文選集注彙存』全三冊(上海古籍出版社、二〇〇〇年)がある。なお、「音決」の「決」を集注本は具體字の「決」に作るが、本稿は全て「決」とする。

(4) 周祖謨「四聲別義釋例」(周祖謨著『漢語音韻論文集』商務印書館、一九五七年。周祖謨著『問學集』上冊、中華書局、一九六六年)は「點發」「圈發」に言及する。また、一字兩讀には聲・韻に違いがあるものと、聲調に違いのあるものがあり、いずれも意義と關連すると言ふ。そして後者では、A品詞の違いに因つて聲調を變えるもの、B意義の違い

に因つて聲調を變えるものに大きく分け、更にその中を幾つかに分けて、諸字の例を列擧する。また、佐藤浩一「仇兆鰲『杜詩詳注』の音注について―一萬を超す音注が意味するもの―」(『日本中國學會報』第五十八集、二〇〇六年)の注(7)を參照。

(5) 『倭讀要領』卷下「發音法」に「如字ハ、字ノ如シトイフコトナリ、多音ノ字ヲ、旁出ノ音ニ讀マズ、本音ノマヽニ讀ムトキ、如字ト註スルナリ、此外ハ音釋ナケレバ、皆本音ノ如ク讀ムナリ、然レドモ多音ノ字ヲ、本音ニ讀ムトキ、如字ト註スルハ、マガラハシキコトアル故ナリ、マガルヽコトナキ處ハ、註スルニ及バズ」と云う。『音決』に見られる「如字」については、拙著『文選音決の研究』(深水社、平成十二年)の序論篇「1、3、3 如字」三六―五七頁で論じた。

(6) 注(5)に擧げた拙著の資料篇「資料(1) 音注總表」一〇七頁を參照。

(7) 陳宏天・趙福海・陳復興主編『昭明文選譯注』全六冊(吉林文史出版社、二〇〇七年)の第四冊、四八五頁、注「99」及び四八七頁を參照。日本語譯は小尾郊一・花房秀樹『全釋漢文大系 文選』全七冊(集英社、昭和四九年(一九五一年)を利用する。

(8) 宗福邦・陳世鏡・蕭海波主編『故訓匯纂』(商務印書館、二〇〇三年)。

(9) 羅竹風主編『漢語大詞典』(漢語大詞典出版社、一九九二年)。

(10) 戸川芳郎監修、佐藤進・濱口富士雄編『全譯漢辭海』(第二版、三省堂、二〇〇六年)。

(11) 注(5)の拙著、資料篇「資料(1) 音注總表」一〇四―一〇七頁を參照。

(12) 反切用字として、どのような字がよく使われるのか、或いは相應しいかについて、古くは陸志韋「古反切是怎樣構造的」(『中國語文』一二六、一九六三年、第五期)の論文がある。

(13) 唐代の音注資料でも、反切下字として「見」字の使用が多いことは、

大島正二著『唐代字音の研究』(汲古書院、昭和五六年)の四二四〜四三二頁を参照。

樂(『論語』陽貨)などの例がある。『經典釋文韻編』下、二二一七〜二二二七頁を参照。

- (14) 注(5)の拙著、資料篇「資料(1) 音注總表」一〇八・九頁を参照。
- (15) 注(5)の拙著、資料篇「資料(1) 音注總表」五二・三頁を参照。
- (16) 河野六郎「廣韻という韻書」(『河野六郎著作集』第二卷、平凡社、一九七九年)は、人名・地名の特別な讀音について述べる。五一六頁には、『廣韻』の又音の生じた一つの原因について述べる。
- (17) 『漢語大詞典』第四册(一九八九年)二二八四頁。『故訓匯纂』一一四五〜一四七頁、『漢語大字典』第二册(四川辭書出版社・湖北辭書出版社、一九八七年)二二八〇・一頁、『大漢和辭典』第六卷、五〇六頁、『全譯漢辭海』七三二頁にも記載しない。『集韻』にもこの音に相當するものはない。思うに、この「*bo*」の音は、『廣韻』で樂字の所屬する入聲鐸韻來母「盧各切」の紐首(小韻代表字)「落」以下、「絡・烙・酪」がこのように讀むことに依る類推か。そうであれば、日本語音はやはり「ラク」である。
- (18) 潘重規編『經典釋文韻編』(臺灣、一九八三年潘序)下、二二一七〜二二二一頁を参照。
- (19) 坂井健一編『宋本 廣韻全譯 第十分冊(効攝)』(汲古書院、二〇〇五年)の一四二頁は「愛好する」と譯す。
- (20) この『釋文』には疑問がある。程樹德撰『論語集釋』第二册(中華書局、一九九〇年)に引く、清、翟灝『四書考異』や黃焯撰『經典釋文彙校』(中華書局、一九八〇年)等を参照。
- (21) 注(20)に擧げた『論語集釋』に引く、明、楊簡『慈湖家記』に「音釋家樂山樂水並五教反、尤爲害道。夫五教反者、好樂切著之謂也。……。」と云う(孝・教は共に去聲效韻字である)。
- (22) 例えば「猶樂、音岳。又五教反」(『毛詩』齊風、鷓鳴)。「所樂、音岳。又音洛。又五孝反。好也。注同」(『禮記』禮運)。「據樂、五教反。又音